

【東郷平八郎像】



(鹿児島市)

【世界の三大提督】

提督とは、艦隊の総司令官のこと。東郷平八郎は、フランス・スペイン連合艦隊を破ったイギリスのネルソン、アメリカ独立戦争でイギリス艦隊を破ったアメリカのジョン・ポール・ジョーンズらとともに、世界の三大提督と言われている。

信念をとおす

東郷平八郎

鹿児島市の、錦江湾を一望できる高台に、多賀山公園があります。この公園に、世界の三大提督の一人、東郷平八郎の銅像があることを知っていますか。公園の碑には、次のように書かれています。

「一九〇五年、旗艦三笠にZ旗をひるがえし、日本海海戦の火ぶたが切っておとされました。東郷平八郎は連合艦隊司令長官として、この海戦を指揮、丁字戦法によって、無敵のロシアバルチック艦隊を全滅させたのです。東郷平八郎は、一八四七年、鹿児島市の加治屋町に生まれ、十六歳で薩英戦争に参加、イギリス海軍の力を目の当たりにして、強い海軍を人生の目標とした少年は、

【多賀山公園の碑】



【丁字戦法】

敵の艦隊と丁字の形になり、側面を迎撃することにより、敵艦の全滅をねらう戦法。なお、この時の日本海軍の作戦には諸説ある。

【バルチック艦隊】

ロシア帝国最大の艦隊。一九〇五年（明治三十八年）の日本海海戦で壊滅的な打撃を受けた。

【関連年表】

- 一八四七年 誕生
- 一八六三年 薩英戦争
- 一八七一年 イギリスに留学する。
- 一八七七年 西南戦争
- 一八七八年 イギリスから帰国する。
- 一八九四年 日清戦争
- 一九〇五年 日露戦争の日本海海戦で指揮をとる。
- 一九三四年 死去

イギリス留学を振り出しに海軍の増強につくし、世界の名将と言われるまでになりました。」

東郷平八郎の半生について、もう少し詳しく見ていくことにしましょう。

東郷平八郎は、鹿児島城下の下級武士の家に生まれ、少年時代は仲五郎なかごろうと呼ばれていました。午前中は、習字や四書を学び、午後は、甲突川での遊泳や演武館での示現流しげんりゅうの稽古けいこをし、夜は軍書や伝記を読むのが日課でした。

さて、仲五郎には、壮九郎そうくろうという兄がいました。まだ元服前の仲五郎が、この壮九郎と父との三人で旅をしたときのことです。

旅先での入浴中、急にのどが渴かわいた兄の壮九郎は、弟の仲五郎に、

【四書】

儒しゅの教きょうを書いた「論語」「大學」「中庸」「孟子」の四つの本の総称。

【元服】

男子の成人の儀式。一般に、十歳から十六歳の間に行われた。

「仲五、仲五つ。のどが渴いたから水を汲んで来い。」
と命令しました。仲五郎は、そのわがままぶりに呆れ、
「もうすぐ上がるのですから我慢したらどうですか。」
と兄を諫めましたが、

「馬鹿言え、我慢できるくらいなら、お前に持ってこい
とは言わぬ、愚図愚図せず早く持って来い。」

と、兄は更に強い口調で繰り返します。結局、仲五郎は
断り切れず、水を汲みに行かされるのですが、ただ黙っ
て言うことを聞く仲五郎ではありませんでした。

「よし、兄がやっていることは、わがままな振る舞いだ、
と分かってもらおう。」

水を汲みながら辺りを見回した仲五郎は、真っ赤に熟
れた唐辛子の実を見付けます。やがて仲五郎が持つてき
た一碗の水を、薄暗い風呂場の中で一気に飲み干した壮
九郎は、途端に、

【当時の風呂】

当時の風呂には、今のように入道
や明かりはなかった。



「あつ、辛つ、辛つ、辛い。」

と茶碗ちやわんを放り投げ、騒さわぎ出しました。口の中が焼けるような辛さです。それもそのはず、仲五郎は唐辛子の実を小さく刻み、兄に渡した水の中に混まぜていたのでした。

しかし、この仲五郎の振る舞いは、長幼ちやうけうの序を乱すものとして、兄から話を聞いた父の怒りを買うこととなります。その後、父から呼びつけられた仲五郎は、

「仲五、お前は目上の者に対して何故なにゆえあんないたずらをしたのか、これからは必ず気を付けること、兄に謝あやまりなさい。」

と叱しかり飛ばされました。しかし仲五郎は、

「あれはいたずらではありません。たとえ子どもながらも、正しいと思っただけのことを謝るわけにはいきません。」

と答えたのです。

【長幼の序】

儒教の教えの一つ。上下関係を重んじた考えで、年下の人が年上の人の意見や考えに従うこと。

「こいつ、生意気なことを言うな、出ていけっ。」

これが父の逆鱗げきりんに触れ、仲五郎は、それより七日の間、父の下役したやくの家での謹慎きんしんを命じられましたが、父の怒りが収まり家に帰ってきた後も、仲五郎は、このことについて自分に非があるとは認めませんでした。後に「負けじ魂」と呼ばれる平八郎の気概きがい、自分が正しいと考えて取った行動に対する、強い覚悟が伝わってくるエピソードです。

江戸時代も終わりにさしかかった一八六三年（文久三年）、十六歳で薩英戦争に参加した平八郎は、イギリス海軍の力を目の当たりにします。この経験から、その後平八郎は薩摩藩の海軍を経て、明治維新後は日本海軍を志し、これが後に、彼の運命を決定づけることとなるのです。

【薩英戦争】

横浜の生麦事件が原因で起こった、薩摩藩とイギリスの戦争。この戦いで敗れた薩摩藩は、外国の優れた技術を知ることとなる。

【下役】
部下。

【謹慎】
一定期間外出を禁止すること。

【気概】
困難を乗り越えていくこととする強い気持ち。

【東郷神社のおみくじ】

東京都渋谷区と福岡県福津市に、東郷神社がある。

福津市にある東郷神社のおみくじは、東郷平八郎が英語が得意だったことから、表は日本語、裏は英語で書かれている。



(福岡県福津市)

やがて時代は明治の世を迎え、二十三歳になった平八郎は、これから必要になるのは何よりも語学だと考え、鹿児島を出て横浜に向かいました。そこで二、三か月ほど英語の初歩を学んだ後、さらに東京に上って英語の塾じゅくに入りましたが、他の塾生は平八郎よりずっと年下の者ばかりで、ひげを生やした平八郎の姿はかなり目立つたと言います。

「何だあのアンクル（おじさん）大きな凶体ずうたいして、これからABCかい。」

と塾生たちは笑いましたが、平八郎は一向に平気で、昼夜を問わず英語を勉強し、五、六か月もすると、塾生たちは誰も、英語力では平八郎の足下にも及ばなくなりました。

そして一八七一年（明治四年）、明治政府は、海軍士官養成のため、イギリスへの留学生派遣を決定します。

【平八郎と肉じゃが】

東郷平八郎が、イギリスのポーツマス留学時によく食べたビーフシチューを、日本風にアレンジして作らせたものが、「肉じゃが」の元祖だと言われている。

既に日本海軍の一員となっていた、当時二十四歳の平八郎は、ここでも必死に勉強し、見事に十二名の英国留学生の一人に選抜されました。

一八七一年（明治四年）から一八七八年（明治十一年）までの七年間、平八郎は、留学生としてイギリスで過ごします。留学先のポーツマスの学校では、「T. O. G. の T. O. G.」（中国に行け、の意味）」とか、「小さな日本人」「だんまりの日本人」と馬鹿にされるなど、おしやべりな性格だった平八郎も、無口になってしまったと言われています。それでも平八郎は、

「外国人だからといって、人間が特別に優れているというわけではない。日本人でも、一生懸命にやりさえすれば、外国人に負けるはずはない。いや負けてたまるか。」
という負けじ魂の信念のもとで、勉強に実技に全力を尽

【考えてみよう】

平八郎を馬鹿にした人々の言動から、あなたは何を感じるだろうか。

【考えてみよう】

何故、平八郎は逃げ出さなかったのだろうか。

くしました。やがて平八郎は、イギリスでも周囲の賞讃しょうざんを集め、「誠実で勤勉な日本人」と尊敬を込めて呼ばれるようになります。

折しも、留学中の一八七七年（明治十年）、日本では西南戦争が起きました。薩摩出身の留学生の中には、「帰国して、西郷軍に加わり戦おう。」と主張する者もいましたが、平八郎は、

「我々は、これからの日本の発展に尽くすために留学しているのだから、その職分を全うすればよい。」

とこれを引き留め、勉学に専念させたと言います。

八年間にわたる英国留学で、海軍についての知識や技術を身につけた平八郎は、帰国後の日本の海軍の発展に大きく貢献します。そして、一九〇五年（明治三十八年）には連合艦隊司令長官として、圧倒的に不利と言われた日露戦争の日本海海戦を指揮し、国難を救ったのでした。

【東郷通り】

トルコでは、日本海海戦の勝利を自国の勝利のように喜び、子供が「トールゴー」、通りが「トールゴー通り」と名付けられるなどした。

【西南戦争】

一八七七年（明治十年）二月に起きた、西郷隆盛を中心とする鹿児島族の反乱。その年の九月に政府軍に鎮圧された。

【考えてみよう】

西南戦争に参加しようと主張した留学生に対し、勉学に専念するように引き留めた、平八郎の気持ちについて考えてみよう。



【東郷平八郎誕生地】



一九三四年（昭和九年）、平八郎は八十六歳の生涯を閉じましたが、その国葬が執り行われた際には、イギリスやアメリカなど、多くの外国の海軍関係者が出席し、その死を悼^{いた}みました。

現在の鹿児島市内の加治屋町には、平八郎誕生地の碑があります。加治屋町に生まれた負けん気の強い少年は、自らの信じた道を進み続け、世界の名将となったのです。
